

# オトナからみる大学生、

# 期待そして願い

「未来の主演」たる大学生に期待をかけた。  
 彼らは「人にやさしい」とともに「自分にもやさしい」。  
 しかし、より多くの若者たちが、未来に向けて  
 「もっと、自分に強くなろう」という気持ちをもてるように支えたい。  
 自律社会は、そんな若者たちに託すに値する  
 未来社会だと思ふ。

HRI 主席研究員  
 中間真一

## 2025年、 日本社会の主演たち

試しに Google で「大学生意識調査」  
 をキーワードとして検索をかけてみた。  
 結果は瞬時に約27万5千件。トップ画面  
 に並んだサイトを見ただけでもさまざま  
 な情報にアクセスできる。そのような中  
 で、今回ヒューマンルネッサンス研究所  
 (HRI) が実施した大学生意識調査は、  
 何のために、大学生たちの何を知ろうと  
 したもののなのか、最初に明らかにしてお  
 こう。

HRI は、オムロンという企業グルー  
 プの中で、未来社会・生活の研究開発組  
 織として位置づけられている。独自の未  
 来社会仮説をもち、2025年あたりか  
 らの社会を「自律社会」と考え、その仮  
 説検証とともに、現在から未来へと延伸  
 していくフォーキャストイング、自律社  
 会という未来の姿から現在に辿るバック  
 キャスティング、両方向から私たちの未  
 来への課題を見通そうとしている。  
 2025年の日本そして世界は、これ  
 から15年以上も先であり、誰も正しく予  
 測することなどできない。しかし、ほぼ  
 明らかな未来もある。それは、その時の

社会の中心部にいるのは「誰か？」とい  
 うことだ。今を生きる大学生たちは、そ  
 れぞれの人生のキャリアを経て、その頃  
 に30代後半の年齢となっているはずだ。  
 養われ、育てられてきた今までは違つ、  
 また仕事や家庭という新たな環境や立場  
 に立ち、彼らは2025年社会の中心近  
 くで生きていることに間違いない。  
 もちろん、これから約15年間にわたる  
 人生経験の中で、彼らは成長し、変貌を  
 遂げるであろう。しかし、私自ら25年以  
 上前の大学生時代を顧みると、今と何ら  
 変わっていないところもたくさんある。  
 同級生たちとの邂逅の場面でも、彼らの



個性や基本的な価値観は変わっていないと感じるこのほうが多い。

そこで、H R I では「自律社会」の主役を演じるであろう、今の大学生たちに、毎日の暮らし、夢や希望、価値観、未来観などを尋ねた。その結果をもとに2025年の社会と、そこへ向かう道程の特徴や直面する課題、新たに想定される社会ニーズを察知しようと試みた。また、彼らを大切な経営資源として受け入れて、活躍を期待する企業組織は、彼らの強みと弱みをどのように支えればよいのかについても考えた。巻頭にて、調査結果を思い返しつつ、皆様に問題の一石を投じてみたい。



## 大学生に「あるもの」、 「ないもの」

今回のアンケート調査実施にあたっては、事前に数十名以上の大学生へのインタビューや、大学教員の方々へのインタビューを行った。協力いただいた青山学院大学、大妻女子大学、慶應義塾大学、

国際基督教大学、駒澤大学、相模女子大学、職業能力開発総合大学校、東京大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京理科大学、東北芸術工科大学、山形大学、米沢女子短期大学、早稲田大学の学生や教員の皆様には、この場を借りて重ねてお礼する次第だ。

私もこれらすべての場に出かけ、大学生たちの言葉や表情から、彼らに通底する何かをつかもうとし続けてきた。まず、大学生たちに無いものから挙げてみよう。「覇気」、「野心」、「向上心」、「自信」、「意志」、「高慢さ」、「悪意」、「駆動力」このくらい挙げれば、読者の皆さんもうんざりし始めるだろう。では、彼らに「あるもの」も挙げてみよう。「優しさ」、「穏やかさ」、「しなやかさ」、「真面目さ」、「誠意」、「吸収力」、「適応力」、これらは決して先入観から挙げているものではない。すべて、彼らとの出会い、語り合いから得られた実感である。

## 大学は「学校化」した

いったい、大学生たちにとって「大学」という場、「大学生」というステージは、どんなものなのだろうか。40代半ば以上の世代感覚のままでは勘違いがありそうだ。

本調査結果にコメントを寄せてくれた気鋭の社会学者、苦米地伸氏も指摘していたが、もはや大学は「学校化」しているようだ。つまり、高校までと同一軌道上にあり、平日は毎日出かけていくべきというルールの下にある場なのだ。そして「工場化」という見方もできる。学生たちは指定の位置について待っている、ライン上に並ぶ教員たちから次々に「授業」というサービスによる「知識」を組み付けられて後工程に送られる。時々ライン上で行われる品質検査をパスしながら、「完成品」として就職先へ出荷されていくような感じだ。まさに、幼稚園や小学校から続いてきた「学校」という「工場」の、コンベアライン上で営まれる一貫生産のようだ。

これこそ大学進学率が50%を超えた日本の「大学のユニバーサル化」なのかもしれない。偏った個人的見解かもしれないが、かつて通ってきた大学は「学校」ではなかった。何やら曖昧で、試行錯誤のムダが許され、世間の不条理も味わえる、自立へのモラトリアムのような、出入り自由な「変なたまり場」だった。本レポートの表紙には「プリズム」がデザインされている。まさに大学とは「屈折」や「分散」を起こさせるプリズムのような場であった。

しかし今や、そんな大学観を前提に、

日本の大学生を語ることはできなさそう。今後ますます知識社会化が進む中、彼らを重要な経営資源として活躍に期待をかける産業界、そして日本社会は、これを是認してよいのだろうか。工場生産が目指すものは、高い機能を安いコストで、均一品質でムダなく作り出すことだ。日本は、優れた工場文化を築くことにより成長を遂げてきた。しかし、「自律社会」という未来への道程にも通用するものだろうか。

インタビューに応じてくれた18歳の神田若菜さんは、小学校低学年時代の3年間以外を、イタリア、アメリカ、イギリスで暮らしてきた。その彼女は、親や教師にガイドされてやってきた高校までと、大学との間を明らかに区切っていた。大学とは「自分で何かを選択して、それを集中してやり通すための場」なのだ。「卒業するまでに大人になるための場」なのだ。これは、単なる個人差として理解すべきなのだろうか。



## 「上昇気流」が生じない社会

H R Iの鷲尾、澤田による分析レポートからもわかるとおり、彼女らが特徴的に感じ取ったことは、大学生の「平らな指向性」や「ヨコへのバランス感覚」だ。それを積極的な未来価値としてとらえて論じている。確かに、急激なバラダームシフトの中で「適者生存」のふるいかけられる当事者として、未来適合性の高い、生物的合理性の高い生き方だ。しかし、若者批判の論調としてよく出てくる「覇気がない」、「向上心がない」という指摘も、同じ姿を違う角度から見た結果なのだ。

大学に出かけたり、大学生とのやりとりをしながら、私は一つの欠落を感じていた。それは「上昇気流」だ。大学という場にも、大学生の心の中にも、もちろん例外もあつたが、大きな人道雲を立ち上らせるような上昇気流を感じることができなかつた。なぜだろう。地面の熱が足りないからではないか。私たちが生



きる今の社会に、上昇気流を生じさせるような熱源が存在するだろうか。冷やすための冷媒なら、いくらでも思い当たる。冷えた重たい空気が、上方から垂れ込める中で、若者たちは圧されている。

かつて、社会の熱源は経済活動にあつた。もはや、成熟期を迎えた工業社会の中で、以前と同様の経済熱源を求めのは難しい。新たな熱源を見つける時だ。それは、産業界に限ることなく、インタビューした医学生の岩崎陽平さんをはじめ、多くの問題意識をもった大学生たちが関心を示していた「社会的」「公共的」なるものへの貢献活動にも見い出せそう

だ。私の子どもが通う高校の担任の先生は、保護者との面談の場で話したそう。 「貧困や飢餓、感染症、紛争の中で喘ぐ人びとを救おうと、国際社会での貢献活動を将来の進路として希望する生徒が増えていきます」と。そして、「僕は、そんな彼女たちの意志を素晴らしいと感じ、教師としてうれしくなるとともに、大人たちが地球上に生んだ負の遺産の後始末を、若い力ばかりに頼っていてよいものなのだろうか、もつと彼女らが前向きで夢のある進路を目指せなくていいのだからと申し訳なくります」というようなことを述べていたそう。

## 自己責任と社会責任

熱気の無い社会に、熱気あふれる人間が育つわけが無いのであれば、覇気に欠けた若者たちを一方的に責めるわけにはいかない。NPOカタリバという団体が主催した「格差時代の夜明け前」という興味深いシンポジウムに参加した。会場

ホールには、前方と後方で大学生と社会人が分かれて着席した。冒頭、岩淵弘樹監督・主演『遭難フリーター』という映画の短縮版が上映され、工場に勤務する派遣労働者（監督本人）の暮らしぶりがスクリーンに表された。その後で、司会者は、このようなフリーター生活を生んだ責任の所在を会場に向けて問うた。

その結果は、私には意外だった。大学生参加者では、フリーター当事者の「自己責任」に同意した人が、およそ6割近くに及んでいた。一方、社会人では「社会の責任」に同意した人が多くを占めた。じつは、私たちのインタビュウの中でも、大学生たちに同様の質問をしたことがある。そこでも、「自己責任」という回答



は多かったのだ。

「自己責任による自己選択、この自由こそ個人を尊重する豊かな社会のあり方なのだ」という昨今の構造改革的論調は、大学生たちのこれまで経てきた学校教育や日常生活の中でも、大きな影響を及ぼしてきたであろう。しかし、その結果生じている社会問題に対して、大学生たちは、なぜこれほどまでに従順なのだろう。なぜ、社会を批判せずに自己完結して解消しようとするのだろうか。それが、今の時代の処世術なのだろうか。

そのシンポジウムで、もう一つ印象に残った会場への質問の結果があつた。今の政治に満足できないのは大学生も社会人も同様だったが、次の国政選挙で投票しようと思っっている大学生は少なかった。そこで、私は直近の国政選挙として平成19年7月に実施された参議院選挙の年代別投票率を確認してみた。

20代前半の全国有権者数は約1.9万人、投票者数は0.6万人、投票率32.8%だ。これに対して60代後半の有権者数約2.2万人、投票者数は1.7万人、投票率77.7%である。もし、この投票率が逆転してい



るような社会であれば、選ばれる議員、

いや立候補者も違っていたかもしれない。政治が社会を決めているのは紛れもない事実だ。そのシステムに対して、大学生たちは関わりをもとうとしない。やりたい人にお任せで、自分は社会からはみ出さない程度に自分らしく生きる。摩擦や無駄は最小限に、活動範囲は安心して周囲を見渡せる程度に。そういう彼らが想定する未来は、不安はあるけれど、暗くはない未来だ。雨後の小さな水たまりをマイ・サンクチュアリとして、水面を滑るように楽しむアメンボを想起してしまつた。



「海草」と「勁草」、  
「洋洋」と「やうやう」

いくぶんオトナ視線に偏つた大学生像からの問題提起となつてしまつたのだろうか。しかし、今回の調査を通じて、私の大学生への期待は高まつた。若者や大学生の可能性や勢いの広がり指して「前途洋洋」という言葉を使う。これは、若者たちを受け入れる社会の前途可能性も「洋洋」だからこそ使えたのではなから

うか。

一方、今の社会の前途は霞んでいる。「春は、あけぼの。やうやうしるくなくなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」、枕草子の「やうやう」こそ、夜から朝を迎えようとする者の「漸(ようよう)」の態度なのかもしれない。大学生たちの中に見つけた態度の兆しは、まさにこれに合致していた。

また、私には大学生たちの生き方が、「海草」のように見えた。不確実な潮の流れに対して、やわらかに応じ、自らの芯を折つてしまうことなく、海面上に頭を飛び出させることもなく、海中の養分を得て育っている海草だ。順応性に優れている。これは、否定的な比喩ではない。インタビューでの元吉麻菜さんとのやりとりも、まったく力みを感じず、曲線で流れていくようだった。

もう一つ、同じ「草」でも風に強く、節操、意志の堅固なことを例える「勁草」という草がある。「疾風知勁草」(強い風が吹いて、初めて強い倒れない草がわかる)という後漢書の言葉から引いたものらしい。「海草」と「勁草」、私の大学生への眼差しは、この二つの草の間にたどりついた。



期待したい「自律社会」の  
主役たち

私たちは、「自律社会」という社会の特徴を、「自立」と「つながり」による、「個人」が「自由」で「生きる幸せ」を求めることのできる社会だと考えている。「承認」の中の「試行錯誤」が許される社会だと考えている。そのような社会に生きる人間像を簡潔に表現すれば、「人にやさしく、自分に強く」ということだろう。

そこで、最後に「未来の主役」たる大学生に期待をかけた。彼らは「人にやさしい」、しかし「自分にもやさしい」のではなからうか。もちろん、インタビューを重ねる中では、「自分に強い」大学生とも出会った。そういう若者たちは、もつと強くなれるように未来へ支えたい。そして、より多くの若者たちが、未来に向けて「もつと、自分に強くなる」という気持ちをもてるように支えたい。自律社会は、そんな若者たちに託すに値する未来社会だと思ふ。

企業組織においても同様だ。先の見通しにくい時代だからこそ、企業経営は自律人材を欲している。オムロンも同様、作田久男社長は自律した働き方について、「もつと、話し合おう。話し合いな

くして価値創造への周囲の理解は得られない。その理解の先に、自分の納得のいく自律的な行動が生まれる」ということを従業員に呼びかけている。これから入社してほしい大学生も、まさにこのような、組織の中で自律的に仕事を進められる人材なのだ。

大学とは、まさに「社会にやさしく接し、自分の強い力を磨く」ための場として、もつともつと使いこなせる場のはずだ。そんな大学を、大学生も私たちオトナも、社会全体でもつと求めていこうではないか。



中間真一 (なかも・しんいち)

HR 主席研究員。1959年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、富士写真フイルムを経て現職。埼玉玉大学大学院経済学研究科修了。学びの場の兆しづくりを目指した「てら子屋」の活動を手がける。共著書に『スウェーデン―自律社会を生きる人びと』(早稲田大学出版部)、『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎ルネッサンス)など。

